

第 88 回麻布獣医学会 一般演題 11

肺葉破裂をおこした慢性横隔膜ヘルニアの猫の 1 例

川野 悦生, 加木 亜希子, 山本 容子, 藤本 恭平

川野獣医科：広島県

1. はじめに

横隔膜ヘルニアのほとんどは外傷性により生ずる。

それに伴い呼吸困難や血流障害によりショック状態となることもある。受傷後 24～72 時間で状態が安定し、そのまま数週間から数年安定することもある。

今回我々は慢性の横隔膜ヘルニアの猫で急性呼吸困難をおこし外科的手術を行った症例に遭遇したのでその概要を報告する。

2. 症 例

日本猫の雑種, 6 歳令, 去勢済オス, BW3.2kg, 前日からの呼吸困難を主訴に来院し, 来院時はチアノーゼを呈し直ちに ICU 内にて内科的治療を開始した。胸部単純 X 線では腹腔内臓器が胸腔内へ入り込んでいるため心臓, 肺の陰影の確認は困難であった。数時間しても呼吸状態の改善が認められなかったため外科的手術を実施した。右側の肺葉は認められず, 左側の後葉の含気は確認できたが, 前葉部は血餅に覆われていた。血餅を取り除くと肺実質の原形は認められなかった。気管支の断端縫合と横隔膜ヘルニア部位の縫合を行った。

残念ながら術後すぐに呼吸不全にて死の転帰をとった。

3. 考 察

横隔膜ヘルニアの外科的な処置の実施時期は心肺不全の程度, 臓器絞扼の有無に依存している。特に慢性の場合は長期にわたり臓器が変位し突然破裂する可能性もある。

今回のように片側の肺がヘルニアを起こした数年前にすでに損傷をうけ無気肺となり, 残った片肺も脆弱化が進行し突然破裂することもある。CT 検査では確定診断が可能であると思われるが, エコー, レントゲン検査では確定診断に至らず開腹して確認することになる。症例では右側肺がすでに無く, 今回何らかの原因で左側肺の前葉部が破裂し 1 日だけではあるが後葉のみで呼吸を行っていたと思われる。

一般的に猫では肺全容量の 50% を摘出しても生存可能である。

しかし, 今回は手術前より 75% 以上を失った状態となっており回復の見込みはかなり困難であった。現段階では人工肺葉や肺胞も商品化されたものはない。ヒトでは急性呼吸窮迫症候群 (ARDS) 時に人工肺を装着するが獣医療では普及しておらず, 今回のようなケースでの救命にはかなり課題が多いと思われた。